

相互作用と学習

—ディスコース・ポライトネス理論の観点から

宇佐美 まゆみ

要旨：

本論では、対人コミュニケーションにおける「相互作用」と第二言語における円滑なコミュニケーションの方法の「学習」というものを、「ディスコース・ポライトネス理論」(宇佐美 2001a, 2002, 2003b 等)の枠組みで考える。そのために、まず、対人コミュニケーションにおける相互作用を分析するためには、ローカルな観点とグローバルな観点双方からの分析が必須であるということを述べる。その上で、「接触場面」における「学習」について、「ディスコース・ポライトネス理論」の枠組みを用いて、談話研究の視点を生かして捉え直した「オーラル・プロフィール」の3つの観点(宇佐美 2006a, 2008(予定))から論じる。そして、目標言語において「円滑なコミュニケーション方法を学習する」ということは、目標言語・文化における様々な談話の「基本状態(default)の見積もり」、種々の言語行動の「フェイス侵害度の見積もり」、及び、「フェイス侵害度に応じて選択されるポライトネス・ストラテジーの見積もり」が、その言語・文化の成員の平均的な見積もりから大きく乖離しないようになることであると位置づける。また、ローカルな観点からは、コミュニケーションの失敗と捉えられるやりとりも、グローバルな観点から見ると、そのような相互作用自体が、語彙や反応の仕方などの学習を促進していると考えられることを示す。

キーワード：

ローカルな観点とグローバルな観点、ディスコース・ポライトネス理論、基本状態(default)、見積もり差(De 値)、伝達意図の達成度、ポライトネスの適切性、言語行動の洗練度、相互作用、学習

1. はじめに

相互作用が学習を促進するということは、最近、特に、認知科学、発達心理学研究、第二言語修得¹研究などにおいて広く主張されるようになってきた(Larsen-Freeman & Long 1991, Lave & Wenger 1991, Long 1996, Pica 1994, Swain 2000, Gass 2003 等)。しかし、一口に「相互作用と学習」と言っても、その捉え方は、分野や研究によってさまざまである。例えば、発達研究において分析されている相互作用は、母親と子どものやりとりを観察したものや

(仲 1995, naka 1996 等)、「課題達成型のタスクがどのようにして達成されたか」という観点から「学習」を考察しているもの(内田 1999, 田島 2003 等)などがあるが、それらはいずれも、子どもと周りの人々との社会的な相互行為が、子どもの学習や認識・行動の発達に大きく影響を及ぼすことを指摘している。

また、多くの第二言語修得研究において、「相互作用は、言語学習を促進する」と報告されているが、これらの研究で扱っている「相互作用」とは、学習者が、母語話者か自分より言語能力が高い相手と行う会話におけるインタラクションであることが多く、そこで見られる「学習」とは、「学習者が言語に関する知識を得て、頭の中に中間言語を作り上げていくこと」を指すことが多い(Long 1983, 1996, Pica 1994, Swain 1985, 1998, 2000, Gass 2003 等)。状況論的学習論では、相互作用とは人間同士が行うものだけでなく、学習主体をとりまく環境や道具をも含み、学習とは、学習主体が変容するさまと捉えられている。例えば、「正統的周辺参加」(Lave & Wenger 1991)の考えによると、「学習」とは、「学習主体が実践共同体への周辺的な参加から十全な参加へと向かう過程」とされる。つまり、状況論的学習論においては、「学習」とは「周りの人や道具との関わりのなかで行うものである」という考えが強調されるようになってきている(高木 1996, 上野 1999)。

以上で述べたような先行研究の知見に共通していることは、「学習」を、「学習者が、人間同士の相互作用を通して互いになんらかの知識を共有していくこと」であると捉えている点である。それでは、人は、どのようにして第二言語における円滑なコミュニケーションの方法についての知識を他者と共有していくのだろうか。本論では、日本語母語話者と日本語非母語話者(日本語学習者)の「接触場面」の会話における「相互作用」に焦点を当て、「第二言語における円滑なコミュニケーションの方法」の「学習」について、「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から考察する。

本論の構成は以下の通りである。まず、相互作用という動きのあるものを総合的に捉え、正確に分析するためには、「ローカルな観点」と「グローバルな観点」の双方から分析することが必須であるということを、具体的な会話における「相互作用」を分析しながら例証する。次に、人間の相互作用に重きをおいた対人コミュニケーション理論である「ディスコース・ポライトネス理論」(宇佐美 2001a, 2002, 2003b, 2007a, 2008, Usami 2002)の概要を解説する。その上で、接触場面における具体的な会話を取り上げ、会話に見られる「相互作用」がどのように「学習」とかかわっているのかについて、ディ

スコース・ポライトネス理論の枠組みで捉え、解釈する。

2. 談話研究における相互作用の分析の観点

相互作用と学習の関係を論じる前に、まず、会話という相互作用を分析する際に重要な「ローカル」と「グローバル」という2つの観点について、以下にそれぞれの定義を記し、実際の例を挙げて具体的に説明しておく。また、この2つの観点を含む会話の分析を、「総合的会話分析」(言語社会心理学的アプローチ)²と呼ぶ。

2.1. 「総合的会話分析」におけるローカル分析とグローバル分析

総合的会話分析における「ローカル分析」とは、会話というやりとりの中における「個々の発話の機能」を、当該の発話の前後の文脈程度のローカルな要因を考慮に入れながら、質的に分析、解釈することを言う。例えば、実際の会話の中では、同じ会話における同じ対話相手に対して、それまでは敬体(です・ます体)を使って話していたところを、一時的に、「そう思う」や「すごい」などというように、常体にシフトさせるという現象が見られることがある。このような敬体から常体へのスピーチレベルシフト(ダウンシフト)が生じた発話の機能を「ローカルな観点」から捉えるとは、ダウンシフトした「当該の発話の機能」を、その前後の発話の内容などの文脈を考慮して解釈するということである。そして、その結果、例えば、「そのダウンシフトは、相手に共感を示したり、相手との心的距離を縮めるという機能を持つ」と結論づけるというような分析を、「ローカル分析」と言う。

これに対して、「グローバル分析」には、定量的分析、定性的分析の2つの側面がある。定量的分析とは、話者の年齢や性などの当該会話外の要因の影響を考慮に入れたグローバルな分析を指すが、ここでは、世論調査のように大量の質問紙調査のデータを定量的に分析するものは含まず、あくまで、「総合的会話分析」において、グローバルな観点を考慮に入れた定量的分析のことを指す。また、定性的分析とは、当該の会話の流れやその結末などを考慮に入れたグローバルな観点からの定性的な分析を指す。総合的会話分析には、1つの研究に、このローカル分析・グローバル分析の双方が、なんらかの形で含まれている必要がある。より具体的には、以下の3つのタイプがある。

<タイプ1> 発話のやりとりに影響する当該会話外の要因(話者の年齢・

社会的地位・性等)を考慮に入れて収集したデータを元に、談話全体の特徴を量的に捉えて、それらの要因の影響の比較を行うような分析。

例えば、先にもあげたスピーチレベルシフトの分析を例にあげると、「総合的会話分析」のためには、データ収集の際にあらかじめ、例えば、「対目上」、「対同等」、「対目下」というような要因を設定し、その要因を満たす会話を同数ずつ集めておく必要がある。それらのデータを「ローカル」な観点から分析すると、ダウンシフトには「相手に共感を示したり、相手との心的距離を縮める」機能があると結論づけられる。しかし、「グローバルな分析」とは、さらに、「対目上」、「対同等」、「対目下」との会話ごとにそのような機能を持つダウンシフトの頻度や割合を算出し、対話相手によってその生起率に違いがあるかどうかを検証することも含むような分析を指す。

宇佐美(1995, 2001b, 2001c)では、ローカル、グローバル、双方の観点からスピーチレベルシフトの分析を行うことによって、ローカルな観点からは、「相手に共感を示したり、相手との心的距離を縮める」機能を持つと解釈されたダウンシフトは、しかし、グローバルな観点から見ると、初対面の対目上との会話においては起こりにくいということを明らかにした。このように、ローカル、グローバル双方からの分析があってはじめて、「ダウンシフトは相手との心的距離を縮める機能を持つが、その使用は、目上に対してはほとんどなく、対話相手との関係(ここでは、年齢)に応じて使い分けられている」という新たな知見を導き出すことができたのである。

<タイプ2> 談話中の主要要素の分布形態の多くの会話における平均的なもの(例えば、成人の初対面会話なら「敬体6:常体1:スピーチレベルのマーカーなし3」という分布)を、主要要素(ex.スピーチレベル)の分布の「基本状態(default)」(宇佐美 2003b, 2008 予定;後に詳述)と捉えたり、ある同一要素のカテゴリーの中で50%を超えるもの(例えば、成人の初対面会話における「スピーチレベル」における「敬体」)を、その要素の無標(ex.無標スピーチレベル(unmarked speech-level))と捉えて、それらを考慮に入れた上で、個々の発話の機能を解釈するような談話レベルの分析。

例えば、常体の使用が「50%」を超える会話においては、無標スピーチレベルは常体であると同定できる。そのような会話の中で、車に乗りたいたいという友人に、笑いながら「乗ればいいじゃないですか」というように敬体を使った場合、それらは有標行動(後述)となり、それら敬体の発話は、敬意を表すというよりは、「冗談めかす」といった機能を持つと解釈することが

できる(宮武 2007)。このタイプの分析は、「常体の使用が50%を超える」ということを算出する過程で、既に当該の一発話だけでなく会話全体を分析対象としており、その上で、有標行動としての「敬体」の機能を解釈しているという意味で、グローバルな分析と言える。

<タイプ3> 会話全体の流れや結末を把握した上で、その会話内の1つの発話の真意や機能を解釈するような談話レベルの分析。

例えば、宇佐美(2006c)では、誘い会話において、「飲みに行こう」という誘いの返事としての「下戸なんだよね、母親が」という発話が分析されている。この発話は、一見間接的な「断り」を示唆しているように解釈できるが、「飲みに行こう」という誘いが最終的には受諾されたという結末や、途中のやりとりを含む談話全体の流れを考慮に入れて「グローバルな観点」から分析すると、実は、その発話の真意は、「誘いに対する間接的な断り」ではなく、「自分はあまりお酒が強いので、飲み放題のようなところへ行くのはいやだが、飲みには行きたい」という意図だったということが明らかになった。このような分析を指す。

2.2. ローカルな観点とグローバルな観点を踏まえた総合的会話分析 —不動産屋での問い合わせの会話の分析①

ここでは、「相互作用と学習」を考察するため、ベトナム人男性グエン(仮名)が、引越しの相談のために不動産屋を訪れた際の不動産屋の店員との会話³を用いて、まずは、相互作用の分析には、ローカルな観点とグローバルな観定の双方が必要であることを示す。これは、先に説明したグローバルな分析のタイプ3に相当する。

以下に抜粋した部分は、グエンがはじめにアンケートに記入し、希望する地域と家賃の予算を伝えた後のやりとりである。

談話例1

ライン番号	話者	発話内容
87	店員	家賃の、一番お金を出せる[手を前へ伸ばす]金額は、いくらまでですか？。
88	グエン	[店員の発話の意味がよくわからないという表情で友人のほうを見た後で] あの一え、4せ、4万。
89	店員	4万円ぐらいですね。

90	グエン	4万円ぐらい。
91	店員	/沈黙2秒/ はい、4万円ぐらいで、じゃあ3万円台で探すということですよ。
92	グエン	でも、この一(うん)、この一、お金ぐらいいは(ん)、えっと一、キッチンやシャワーはどう？。
93	グエン	キッチン、シャワー…。
94	店員	キッチン？、えー、光熱費かな？。
95	店員	あのガスとか、電気とか> < 。
96	グエン	<うん> > 、うん。
97	店員	うん、そういうお金をまた別に支払わなくてはいけません。
98	グエン	あー、(うん)別。
99	店員	別です。
100	グエン	えーと、あー、自分の部屋はくはない> < 。
101	店員	<そうで> > すね。
102	店員	え？、別の(ん)、あー(あ[グエンが説明しようと手を広げる])、うん、例えば、んー、ちょっと待ってね。[店員が資料を取りに席を立つ]
103	店員	/沈黙5秒/[資料を持って戻る] こちらの今ちょっと多摩駅の近くの(はい)物件なんです、ちゃんとどのお部屋にもこういうふうにお部屋に(んー)、キッチンがあって、(はい)おトイレとお風呂がある感じですね。[資料(間取り図)を見せながら説明する]
104	グエン	あー、じゃ、全部4万。
105	グエン	1ヶ月4万？。
106	店員	ん、これはちょっと違いますけれども(んー)、1ヶ月4万円のところを、探す、という形になります。

※文字化の原則は、宇佐美(2003a, 2006b)の「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」に従っている⁴。そのため、句点「。」や読点「、」も、例えば、「?。」のように、慣例的な使い方とは異なる使い方をする場合もある。文字化資料の中で用いられている各種記号の説明については、最後の<記号凡例>を参照されたい。

※また、本談話例は、オリジナル・データの途中からの抜粋のため、ひとまとまりの会話における発話の通し番号となるライン番号は、1から始まっていない。

談話例1を、まずローカルな観点から見えていくと、ライン92でグエンは、「家賃が4万円以内の場合、部屋に台所や風呂が付いているかどうか」ということを尋ねたかったが、うまく言えないという「コミュニケーションの行き詰まり(communication breakdown)」を起こしている。そのため、店員は光熱費のことを聞かれていると誤解し、光熱費について答えるという展開になっている。以下で具体的に見ていく。

ライン92で、グエンは、「(3万円台の家賃では)キッチンやシャワーはどう?(付いているか?)」[()内筆者]と質問し、さらにライン93で「キッ

「チン、シャワー…」と、言い直そうとしているが言葉が出てこない。それを店員が助けるように、ライン94で「キッチン?、えー、光熱費かな?」と言う。この談話の前に、グエンが予算の話をしていたこともあり、店員は、グエンが1ヶ月の支払い総額を気にしていると推測したと考えられる。グエンは、「光熱費」の意味がわからないにもかかわらず、ライン95で店員が、「あのガスとか、電気とか」と確認したのに対して、ライン96で「うん、うん」と答えてしまう。それを聞いて、店員はライン97で「うん、そういうお金をまた別に支払わなくてははいけません」と説明する。

ローカルな観点からこの談話を解釈すると、グエンがライン92および93で「キッチンやシャワーはどう?」としか言わなかったことや、ライン96で「光熱費」という言葉の意味がわからないにもかかわらず、その意味を確認せず「うん、うん」と、理解しているかのように応答してしまったことによって、グエンは、自分の尋ねたいことを店員に伝えることができなかった。つまり、グエンのこれらの発話が、ミス・コミュニケーションを引き起こしてしまったと捉えられる。

しかし、その後、ライン100でグエンが「えーと、あー、自分の部屋はない」と確認したとき、店員はライン101で一旦「そうですね」と答えたが、ライン102で「え?」とつぶやく。グエンの「自分の部屋はない」という言葉で、やっと、店員が、グエンは先の質問によって、「キッチンやシャワーが、自分の部屋に付いているのかどうか」ということを知りたかったのだと理解し、これまでのコミュニケーションの行き違いに気づいたと考えられる。また、グエンも、店員の様子から、何か誤解があったようだと感じ、さらに自分の意図を伝えようと、ライン102で、店員が話しているときに、手を広げるようなしぐさをする。店員はそれを受けて「ちょっと待ってね」と言って資料を取りにいき、ライン104で、間取り図を見せながら、部屋に台所や風呂が付いているということを説明することになる。こうして、最終的には、グエンが言いたかったことは店員に伝わり、グエンは必要な情報を得たのである。

一方、この談話を、グローバルな観点(タイプ3)から分析すると、グエンの質問の意図が最終的に店員に通じたという結果を踏まえて、その前の談話におけるやりとりを解釈することになる。まず、ライン91を見ると、店員は「3万円台で部屋を探す」ということの確認をしているので、ライン92の「キッチンやシャワーはどう?」というグエンの発話が、3万円台の部屋に台所や風呂が付いているかどうかを尋ねるものであると推測することは

可能である。しかし、店員は、「3万円台の家賃に光熱費が含まれるかどうか」を尋ねたものであると推測した。ただ、定かではなかったため、店員はライン95で、「ガスとか、電気とか」と確認している。それに対してグエンは、「光熱費」の意味がわからなかったにもかかわらず、「うん、うん」と反応した。ただ、これは、実は店員に応答したのではなく、店員のさらなる発話を促すためのあいづちであったと解釈できる。もし、ここで質問すると、談話の流れが滞り、話の腰が折られると感じたからであろう。つまり、グエンは、コミュニケーションを達成するためにより多くの「リソース」が必要だったので、店員の発話をさらに促そうとしたのだと解釈できる。残念ながら、その後、その応答がもとで誤解が生じてしまうわけである。しかし、店員は、さらにその後の、ライン100の「えーと、あー、自分の部屋はない」というグエンの発話から、グエンが店員の言っていることを理解していないことに気づき、意思疎通を少しでもスムーズにしようと、「間取り図」を取りに行くということになるのである。

このように、この会話におけるグエンと店員のやりとりには、「利用可能なリソースを用いて、意味のあるコミュニケーションを協調的に達成する」(Firth & Wagner 1997: 290)という相互作用の形がよく現れている。このグエンのライン100の「えーと、あー、自分の部屋はない」のように、ローカルな観点からは、グエンが「店員の発話の意味を誤解している」ことを表している発話が、グローバルな観点から見ると、結果的に、Firth & Wagner (1997)が指摘するような、「コミュニケーションを成功させるための重要なリソースを誘発した発話であった」と解釈することが可能になる。つまり、このライン100のグエンの発話は、ローカルな観点からは、単に、グエンの誤解を露呈している発話のように見えるが、しかし、グローバルな観点から見ると、このグエンの「自分の理解を言葉にして確認する」という発話行為が、「相手の発話の意味を理解するための新たな手がかりを引き出すストラテジー」として機能していたということが分かるのである。

話者同士のやりとりのローカルな観点からの分析のみでは、各々の話者の真の発話の意図を解釈することが難しいことはままたある。会話全体の流れとその最終的結末をグローバルな観点から踏まえた上で、個々の場面における発話のやりとりをローカルな観点からも分析するというのが、ローカルな観点・グローバルな観点双方を考慮に入れた総合的会話分析である。会話分析においては、ローカル分析・グローバル分析の双方が必須であり、この2つの観点からの分析をあわせて行うことによって初めて、会話における「相

「相互作用と学習」の関係についての考察も正確にできると言える。

3. 「ディスコース・ポライトネス理論」から捉える「相互作用と学習」

コミュニケーションの成功とは、単に情報の伝達が成功したことだけを意味するわけではない。対話相手に対して、状況に応じた適切な言語行動が行えることもその1つである。これまで発達心理学や第二言語修得論においては、相互作用が語彙などの学習を促進することは指摘されてきたが (Ellis et al. 1994, 1999 等), 言語形式の丁寧度ではなく、実際の言語使用の機能を重視した「語用論的ポライトネス」の「修得」については、まだあまり研究されていない。しかし、ポライトネスこそ、ある一定の社会文化における人と人との「相互作用」を通して修得されていくものであり、語彙や言語形式などの修得以上に、対話相手との相互作用がその修得に重要な役割を果たしていると言える。そのことを踏まえた上で、ここでは、まず、「相互作用」という観点をその体系に組み込んだ「ディスコース・ポライトネス理論」の概要を解説する。その上で、対人コミュニケーション論としての「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から、「相互作用と学習」について論じる。

3.1. 「ディスコース・ポライトネス理論」の鍵概念⁵

ブラウンとレビンソンの「ポライトネス理論」(Brown & Levinson 1987) は、言語形式の丁寧度や敬語だけではなく、「語用論的ポライトネス」を包括的に捉えようとしたものとして一定の評価ができる。しかし、様々な問題を残していることもまた事実である⁶。本論では、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論の問題点を克服するべく新たに提案された「ディスコース・ポライトネス理論」(宇佐美 2001a, 2002, 2003b) の骨格を紹介し、その枠組みに基づいて「相互作用と学習」を考える。

ディスコース・ポライトネス理論には、以下の7つの鍵概念がある。①「ディスコース・ポライトネス」、②「基本状態」、③「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」、④「有標行動」と「無標行動」、⑤ポライトネス効果、⑥見積もり差 (De 値) と、行動の適切性、ポライトネス効果の関係、⑦「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」。

以下、それぞれについて簡単に解説する。

① 「ディスコース・ポライトネス (discourse politeness)」

「ディスコース・ポライトネス」とは、一文レベル、一発話行為レベルで

は捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である」(宇佐美 1997, 2001a, 2002, 2003b, Usami 2002) と定義される。また、特定の「活動の型」⁷の「典型的な状態にある談話の総体」も指す。

② 「基本状態 (default)」

「基本状態」には、以下の2種類がある。1つは、「特定の「活動の型」における談話の「典型的な状態」を指し、「談話の基本状態」と呼ぶ。また、もう1つは、「その談話の基本状態を構成する要素としての「特定の言語行動や言語項目それぞれの典型的な状態」を指し、「談話要素の基本状態」と呼ぶ。前者は、理論的観点から想定するもので、談話内の諸要素を特定するものではない。後者の「談話要素の基本状態」とは、個々の研究において研究対象として設定した要素について、同定・算出するものである。例えば、数多くの同じ活動の型の「典型的な状態の談話」における「主要な言語行動の平均的な構成比率 (分布)」、「各々の要素の平均的な生起率」、「典型的な談話展開パターン」などがある。

より具体的に言うと、「ある活動の型の談話における重要要素の構成比率の基本状態」とは、例えば、成人の初対面二者間会話では、スピーチレベルの構成比率が、敬体6：常体1：スピーチレベルのマーカーなし3、であるのが基本状態であるというような捉え方 (宇佐美 2001b) を言い、「談話内の『特定の要素』の基本状態」とは、スピーチレベルという要素を例にとると、成人の初対面二者間会話においては「敬体使用率が約6割」であるのが基本状態であるというような捉え方 (宇佐美 2001a) であり、「談話の展開パターンの基本状態」とは、依頼会話において、注意喚起→見込みの確認→補助ストラテジー→依頼発話という展開になるのが基本状態であるというような捉え方 (宇佐美 2001a) を言う。

これらの「基本状態」を一般化するには、厳密には、数多くのデータを分析・検証し、同定していく必要があるが、ディスコース・ポライトネス理論の枠組みで行う個々の実証研究においては、「基本状態」自体を一般化することが目的ではないので、当該データで同定した「基本状態」は作業仮説として扱う。そして、当該の言語行動の「基本状態からの離脱度」を「有標性」と呼び、その「ポライトネス効果」は、有標性の度合いについての話し手と聞き手の見積もり差によって、相対的に引き起こされるものであると捉える (詳細は、「⑤ポライトネス効果」を参照)。「基本状態」は、このような「相

対効果」を予測したり解釈するための前提として、同定しておく必要があるものとして捉えるのである。

ディスコース・ポライトネス理論の最も重要な点の1つは、上述の2種類の「基本状態」を「媒介変数(parameter)」として扱うことによって、「ポライトネス効果を相対的に捉える」ということを、より具体化して理論に組み込んだ点である。

③ 「有標ポライトネス(marked politeness)」と「無標ポライトネス(unmarked politeness)」

Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論におけるポライトネスは、基本的には、依頼行為などのように、相手のフェイスを脅かす「フェイス侵害行為」を行わざるを得ないときに、「相手のフェイス侵害度を少しでも軽減するためにとる戦略」として捉えられている。このような「フェイス侵害度の軽減行為」としてのポライトネスを、ディスコース・ポライトネス理論では、「有標ポライトネス」と呼ぶ。

しかし、このように、「相手のフェイス侵害度を軽減するためにとる戦略」としてのみポライトネスを捉えると、フェイス侵害行為(Face Threatening Act: FTA)が生じていない状態にある「日常会話(ordinary conversation)」などにおける「ポライトネス」をうまく説明できないことになる。そのため、我々の日常生活には、「フェイス侵害度軽減行為」としてのポライトネスとは異なるタイプのポライトネスもあると捉えることが必要になる。それは、「特定の状況や場面において期待されている言語行動」と関係する。特定の状況において、「あって当たり前で、それが現れないときに初めてそれが無いことが意識され、ポライトではないと捉えられる」という類のものである。このようなタイプのポライトネスをディスコース・ポライトネス理論では、「無標ポライトネス」と呼ぶ。先に説明した談話の「基本状態」は、「ポライトネス」の観点からは、「無標ポライトネス(相手のフェイスを侵害しない状態)」であると捉えることができる。

ポライトネスの普遍理論を確立するためには、「ポライトネス」をこのような、フェイスの侵害が生じていない状態にある日常会話における「基本状態としてのポライトネス(無標ポライトネス)」もあわせて、より体系的に捉える必要がある。そのためには、ポライトネスを、「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」とに分けて考え、それぞれを体系に組み込んだ包括的な理論を構築する必要がある。

④ 有標行動(marked behavior)と無標行動(unmarked behavior)

談話の「基本状態」は、ポライトネスの観点からは、「無標ポライトネス」である。そして、談話の「基本状態」を構成する要素としての言語行動を「無標行動」、「各々の要素の基本状態から離脱した言語行動(発話行為レベル)」, 或いは、「基本状態とは異なる一連の行動(談話レベル)」を、「有標行動」と呼ぶ。

ディスコース・ポライトネス理論では、特定の談話の「基本状態」は、ポライトネス効果を相対的に捉えるために同定する必要があるものである。つまり、各々の談話と、それを構成する諸要素の「基本状態」を基にして、そこからの有標行動の「動き」や「有標性(基本状態からの離脱度)」に着目して、「相対的ポライトネス」の体系化を試みるのである。

⑤ ポライトネス効果(politeness effect)

談話の基本状態を構成する諸要素は、無標行動、つまり、あって当たり前のものとして、ディスコース・ポライトネスを形作っている。この「基本状態」は、各々の要素の状態としても、複数の要素の分布の状態(異なるスピーチレベルの構成比率等)としても、そして諸要素から構成される談話の総体(ディスコース・ポライトネス)としても、ポライトネスの観点からは、「最適の状態」、或いは、「最も自然な状態」としての「無標ポライトネス」であると捉えられる。それ故に、もし、談話の基本状態を構成する要素の何かが欠けた場合や、或いは、何かが多すぎる場合、それが意識され、ポライトでないと認知されたり、その他の何か特別の効果が生まれると想定するのである。

ディスコース・ポライトネス理論では、「ポライトネス効果」とは、「談話の基本状態や話し手の言語行動、選択された戦略に対する話し手と聞き手の『見積り差(Discrepancy in estimations: De 値)』によって引き起こされる聞き手側からの認知」を表す。話し手と聞き手の「見積り差」をより具体的に記すと、次の3つにまとめられる。①「ある有標行動のフェイス侵害度」についての話し手と聞き手の見積り差、②「談話の基本状態」が何であるかについての話し手と聞き手の見積り差、③「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・戦略」についての話し手と聞き手の見積り差。

いずれにしても、ポライトネス効果には、以下の3種類がある。すなわち、①プラス効果、②ニュートラル効果、③マイナス効果である。これらは、言

(De 値)

	-1	- α	0	$+\alpha$	+1
見積もり差 (De 値) の範囲	$-1 \leq De < 0 - \alpha$	$0 - \alpha \leq De \leq 0 + \alpha$	$0 + \alpha \leq De \leq +1$		
行動の適切性	過少行動 (例: 粗野)	適切行動 (適切)	過剰行動 (例: 慇懃無礼)		
ポライトネス効果	マイナス効果 (失礼, 不快)	プラス効果 (快) ニュートラル効果 (中立)	マイナス効果 (不快)		

見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値): $De = Se - He$

Se: 話し手 (Speaker) の「見積もり (estimation)」(以下の*参照). 仮に, 0 から 1 の間の数値で表すものとする.

He: 聞き手 (Hearer) の「見積もり (estimation)」. 仮に, 0 から 1 の間の数値で表すものとする.

 α : 許容できるずれ幅

*「見積もり (estimation)」には, 以下の3種がある.

- ①「ある有標行動のフェイス侵害度」の見積もり
- ②「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり
- ③「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての見積もり

図1 「見積もり差 (De 値)」, 「行動の適切性」, 「ポライトネス効果」

い換えると, ①心地よい, 丁寧だと感じるという効果, ②ニュートラルな効果 (言語的談話効果: 強調や話題転換などのように, 特に丁寧と感じるわけでも不愉快でもない効果), ③不愉快な, 失礼だと感じる効果である.

⑥ 「見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値)」と「行動の適切性 (appropriateness of behavior)」, 「ポライトネス効果 (politeness effect)」の関係

上述した3種類の話し手と聞き手による「見積もり差 (De 値)」は, もちろん, 絶対的な数値として算出できるわけではないが, 以下の図1に示すように, 0 を挟む -1 から $+1$ までの1つの連続線上に分布すると仮定することによって, 体系的に捉えることができる. 「見積もり差 (De 値)」と「行動の適切性」, 「ポライトネス効果」の関係は, 上の図1ようになる.

つまり, 話し手と聞き手の「見積もり差」が, 0 か, 「許容できるずれ幅 ($\pm \alpha$)」の範囲内に収まる行動は, 「行動の適切性」の観点からは, 「適切行動」とみなされ不快感をもたらしさない. つまり, ポライトネス効果の観点から

は, プラス効果を生むか, ニュートラル効果になる. また, 話し手の見積もりが聞き手の見積もりよりも, 「許容できるずれ幅 (α)」を超えて少ない場合, それは, 行動の適切性の観点からは, 「過少行動」となり, ポライトネス効果の観点からは, マイナス効果 (失礼, 不快) となる. 逆に, 話し手の見積もりが, 聞き手の見積もりよりも, 許容できるずれ幅 (α) を超えて多い場合, それは, 行動の適切性の観点からは, 「過剰行動」となり, ポライトネス効果の観点からは, マイナス効果 (慇懃無礼, 不快) を生むことになる.

これまで, 敬語研究などでは, あまり扱われてこなかった「慇懃無礼」は, デイスコース・ポライトネス理論で解釈すると, 「話し手が, 聞き手が当該の状況で適切であると考える言語行動よりも, 「許容できるずれ幅 α 」を超えて, 「丁寧な表現」を使用した場合 (過剰行動) であると解釈できる.

このように, 実際の「ポライトネス効果」は, 「談話の基本状態が何であるかという見積もり」, 「特定の言語行動に対するフェイス侵害度の見積もり」, 及び, 「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての話し手と聞き手の「見積もり差 (ずれ)」から生まれるという「相対的観点」を, より具体化して理論の体系に組み込んだという点も, デイスコース・ポライトネス理論が初めて取り入れた新しいポライトネスの捉え方である. このような観点は, 「異文化接触場面」でしばしば生じる誤解に基づく問題を記述する際の1つの枠組とも成り得る.

⑦ 「相対的ポライトネス (relative politeness)」と「絶対的ポライトネス (absolute politeness)」

最後に, 「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」についてまとめる. 言語形式について言うなら, 「行く」より「いらっしゃる」のほうが丁寧度が高いとか, その他の条件が一定ならば, 直接的表現より間接的表現のほうが, より丁寧であるというような捉え方は, 「絶対的ポライトネス」を扱っていると言える. しかし, 現実には, いつも常体で話す相手 (スピーチレベルの「基本状態」が常体) に「敬語」を使うと, かえって皮肉やいやみになるというように, たとえ, 敬語を使っている, 「マイナス効果」を生むこともある. つまり, 常体が無標スピーチレベルである談話において「有標行動」となる敬体を使用することは, 言語形式自体は, 「敬体」であるにもかかわらず, 相手に失礼だと感じさせたり, 不愉快にさせたりするというような「マイナス効果」を生み得る. 一方, 仲間意識を高めるために用い

る「ため口(友達同士の言葉遣い)」は、言語表現の丁寧度は低くても、プラス効果として機能することもある。

つまり、実質的に「ポライトネスの効果」を生み出すのは、「言語形式」それ自体の丁寧度ではなく、ある特定の「談話」の「基本状態」からの離脱や回帰という言語行動の「動き」である。そして、その「ポライトネス効果」は、特定の場面においてどのような言語行動が適当であるかという「基本状態の認識」、「当該の言語行動や談話行動のフェイス侵害度」、及び、「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」の3つのうちのどれか、あるいはすべてについての話し手と聞き手の「見積もり差(ずれ)」から生まれるということが分かる。これが、「相対的ポライトネス」という捉え方である。

上述したように、ディスコース・ポライトネス理論は、対人コミュニケーションにおけるポライトネスをより広い観点から捉えて体系化しようとするものであり、円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動としてのポライトネスだけではなく、「失礼」「無礼」「慇懃無礼」といった行動も、マイナス・ポライトネスとして、同一の枠組みで捉えるものである。

3.2. 「ディスコース・ポライトネス理論」の新視点

ディスコース・ポライトネス理論には、以下の6つの新しい視点がある。

- (1) ポライトネスを、「言語行動におけるいくつかの要素がもたらす機能のダイナミクスの総体」として談話レベルから捉える。そして、そのように総体として捉えたポライトネスを「ディスコース・ポライトネス」と呼んで、「文/発話レベル」のみから見たポライトネスと区別する。
- (2) 「基本状態」という概念を導入し、(1)で説明した総体としての「ディスコース・ポライトネス」を、当該談話の「基本状態」という「媒介変数(parameter)」として捉える(「談話の基本状態」)。それとともに、同じ活動の型における数多くの「典型的な状態の談話」において、ディスコース・ポライトネスを構成する各々の要素の「当該談話における平均的な構成比率」や、「各々の要素の平均的な生起率」、「典型的な談話展開パターン」などを、「それぞれの言語行動や談話展開パターンの基本状態」(「談話要素の基本状態」)として捉える。
- (3) ディスコース・ポライトネス理論では、話し手が見積もる「ポライトネス・ストラテジー」と、話し手が実際に行った言語行動のフェイス侵害

度についての話し手と聞き手の「見積もり差(De値)」によって引き起こされる「聞き手側から見た認知」としての「ポライトネス効果」を区別して考える。

- (4) 「ポライトネス効果」は、次の3種の「話し手と聞き手の見積もり差」のいずれか、或いは、すべてによって、相対的に生まれてくると考える。①話し手が実際に行った言語行動のフェイス侵害度についての「見積もり差」、②「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり差、③「フェイス侵害度の見積もりに応じて選択されたストラテジー」についての見積もり差。
- (5) 話し手と聞き手の種々の見積もり差のずれが、「許容できるずれ幅($0 \pm a$)」内に収まる場合の、ある特定の有標行動(一発話レベル・談話レベル)の「ポライトネス効果」は、当該の談話やそれを構成する要素それぞれの「基本状態」を基にして、そこからの有標行動の離脱の度合い(有標性)に応じて相対的に生まれてくるものであると捉える。
- (6) ディスコース・ポライトネス理論は、この「相対的効果」という捉え方を理論の核とする。

3.3. 「ディスコース・ポライトネス理論」の枠組みから見た第二言語における円滑なコミュニケーション方法の「学習」

第二言語で会話を行う際には、情報を伝達するだけではなく、コミュニケーションを円滑に行えるようになることも必要である。ここで、改めて、ディスコース・ポライトネス理論の枠組みで、第二言語における「学習」を解釈する。ディスコース・ポライトネス理論の観点から考えると、第二言語における円滑なコミュニケーションの方法を身につけるということは、目標言語における様々な活動の型における「談話の基本状態」や「談話を構成する諸要素の基本状態」を適切に見積もることができるようになるということであり、また、適切な有標行動が行えるようになるということである。換言すれば、学習者と目標言語・文化の平均的な成員との種々の談話の「基本状態」の捉え方がほぼ一致しており、且つ、ある言語行動の両者の「フェイス侵害度の見積もり差(De値)」が「0をはさんだ許容できるずれ幅($0 \pm a$)」の範囲内に収められるということである。つまり、フェイス侵害度の見積もり差(De値)が0か許容範囲内であれば、マイナス効果は生まれず、よって「コミュニケーションが円滑に行われている」ということになる。

例えば、聞き手としての母語話者が、ある場面における「フェイス侵害度」

から考えると、「そうだったんですか」と「敬体」を使うのが適切であると見積もっているときに、話し手(学習者)が「そうなの」と常体を使い、それが聞き手の期待(見積もり)より低すぎた場合、見積もり差(De値)が $0-a$ の許容範囲よりも低くなり、したがって相手に「失礼だ」(マイナス効果)と感じさせることになるかと解釈できる。逆に言うと、学習者が、当該談話の基本状態を学習や経験を通して把握し、それに合わせた言語行動を行ったり、フェイス侵害度や基本状態、選択すべきストラテジーの見積もり差であるDe値を、「 $0 \pm a$ 」の許容範囲内に収めることができていれば、その言語における適切な言語運用を学習し、実践していると考えられることができる。

次節では、接触場面の自然会話を取り上げ、ディスコース・ポライトネス理論の観点から「相互作用」を分析し、その「学習」とのかかわりを考察する。その際、従来のタスク達成の観点から捉えるプロフィシェンシーとは異なる、談話研究の成果を踏まえて改めて捉え直した「オーラル・プロフィシェンシーの3つの観点」(宇佐美 2006a, 2007b, 2008 予定)を用い、「学習者が、いろいろな行動のフェイス侵害度や基本状態の、目標言語・文化の成員との見積もり差(De値)を、「 $0 \pm a$ 」の許容範囲内に収められるようになる」とはどういうことかを、具体的に考察していく。

4. 談話研究の視点から捉え直した「オーラル・プロフィシェンシー」の3つの観点から見た「相互作用と学習」

宇佐美 (2006a, 2008 予定) は、談話研究の成果を踏まえて、「オーラル・プロフィシェンシー」を、以下の3つの観点から複合的に捉えることを、提案している。

- (1) 伝達意図の達成度：当該言語において意思疎通ができる能力
- (2) ポライトネスの適切性：当該言語における意思疎通や感情のコミュニケーションが、対人関係的観点から円滑に行える能力
- (3) 言語行動の洗練度：当該言語・文化において洗練されているとみなされている言語行動ができる能力

(1)の「伝達意図の達成度」は、文字通り、自分の意図をどのくらい正確に相手に伝えられたか、また、相手の意図を理解できたかの度合いである。(2)の「ポライトネスの適切性」は、先の3.の節で紹介した「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から「ポライトネス」を捉えるものであり、適切

性の判断は、「相対的」なものであるというところが、従来のポライトネスの捉え方や評価とは異なる点である。(3)の「言語行動の洗練度」は、文レベルの表現の洗練度(文法、発音、語彙等)と、談話レベルの洗練度(語用論的能力、社会言語学的能力、流暢さ)双方から考える。日本語においては、難しい語彙や敬語が適切に使用できているということは、文レベルの洗練度が高いということになる。一方、文脈にもよるが、例えば、「明日は、都合が悪いです。」よりも、「明日は、ちょっと…」のように、状況に応じて「中途終了型発話」を適切に使用できるということが、当該の語彙数は少なくとも「言語行動の洗練度」が高いとみなせることもある。また、直接的に依頼をするのではなく、前置きやヘッジを適切に用いることができるというようなことも、談話レベルにおける「言語行動の洗練度」の高さであると判断できる。一口に「オーラル・プロフィシェンシー」と言っても、これら3つの観点からのプロフィシェンシーの度合いがアンバランスなこともありえる。故に、相互作用とオーラル・プロフィシェンシーの学習の関係についても、この3つの観点それぞれをよく踏まえながら捉えることが必要である。以下で、具体例を見ていく。

4.1. 不動産屋での問い合わせの会話の分析②

改めてベトナム人男性グエンが、引越しの相談のために不動産屋を訪れた場面を見ていく。ここでは、日本語のプロフィシェンシーにおいて重要な役割を果たし、且つ、短い談話からでも取り上げて例として示しやすいスピーチレベルについて、「伝達意図の達成度」「ポライトネスの適切性」「言語行動の洗練度」の3つの観点から、グエンが「母語話者との見積もり差(De値)」を「 $0 \pm a$ 」の許容範囲内に収めることができているかどうかを考察する。そのため、グエンのすべての発話のスピーチレベルの適切性を、2名の日本語母語話者が評定して、評定者間信頼性係数を算出した($\kappa = 0.79$)⁸。各発話の右側にセルを設け、その結果を、スピーチレベルの使用が自然な場合は○、不自然な場合や失礼に感じられる場合は×を記した。また、「敬体」が必要だと判断された場合は「要」、敬体がなくとも自然な場合は「不要」と記した。以下に抜粋した部分は、談話例1と同じく、グエンがはじめにアンケートに記入し、希望する地域を伝えた後のやりとりである。

4.1.1. 「伝達意図」の達成度

まず、「伝達意図の達成度」という観点から考察する。

談話例2

ライン番号	話者	発話内容	スピーチレベル
67	グエン	/少し間/あと、あー、ん、[地図を指して] この、駅の近くに、	/ ⁰
68	店員	はい。	
69	グエン	スーパーマーケットがありますか？。	○
70	店員	はい、ここ [地図を指して]、[丸正] っていうところと、(あー)ここ [地図を指して]、[サクラコマース]。	
71	グエン	[サクラコマース]。	○
72	グエン	あの、何の店ですか？。	○
73	店員	これスーパー<マーケット>ですね < >。	
74	グエン	<スーパーマーケット> < >、あ、そう。	←要[ですか] ×
75	店員	あと郵便局とか、色んなものここにね(おお)、大きな車返団地「くるまがえしだんち」っていうのがあるので、ここ大きなスーパーマーケットが、ね、団地のためにあるような感じです。	
76	グエン	でも、値段はどう？。	←要[ですか?] ×
77	店員	値段は比較的、中央線に比べれば全然安いと思いきまよ < >。	
78	グエン	<あー> < >。	○
79	店員	<はい> < >。	
80	グエン	<いくら> < >。	←要[ですか?] ×
81	グエン	えっと、1ヶ月(んー)いくら？。	←要[ですか?] ×
82	店員	いくらぐらいをご希望ですか？=。	
83	店員	=一番出せる金額はいくらですか？。	
84	グエン	ん、なんですか？。	○
85	店員	ん、家賃。	
86	グエン	あ、い、意味、家賃は？。[→]	←[ですか] 不要 ○
87	店員	家賃の、一番お金を出せる [手を前へ伸ばす] 金額は、いくらまでですか？。	
88	グエン	[友人のほうを見た後で] あの一え、4せ、4万。	←要[です] ×
89	店員	4万円ぐらいですね。	
90	グエン	4万円ぐらい。	←[です] 不要 (復唱のため) ○

グエンはライン80で「いくら？」とだけ聞いた後、即座にライン81で「1ヶ月いくら？」と言い直した。話の流れからは、家賃の「相場」を教えてもらいたかったと考えられる。しかし店員は、具体的な相場については触れず、ライン82で「いくらぐらいをご希望ですか？」と尋ね、さらに次のライン83で「一番」という言葉をやや強調し、「一番出せる金額はいくらですか？」と言い直す。店員は、「一番」という言葉で切り出したせいか、続く表現が「お金を出せる金額」とやや不自然になってしまっている。グエンのあまり理解できていないような表情を見て、フォリナートークになってしまったとも考えられる。

店員の発話がかえって難しい表現になってしまったことと、また、ここで質問されるとは思ってもみなかったのか、グエンは、ライン84では「なんですか？」ととまどったように聞き返している。この後、しばらく意味交渉が続くが、店員は、「家賃」の意味を問われたのにもかかわらず、それには答えず、ライン87で「家賃の、一番お金を出せる金額はいくらまでですか？」と、ライン83と同じ質問を繰り返す。ただ、「出せる」の部分で手を前に出すようなゼスチャーをし、ゆっくりと「いくらですか？」と言うことによって、グエンの理解を助ける努力はしている。その甲斐あってか、グエンは意味を推測でき、ライン88で「4万」と答えている。ライン89の店員の確認のための復唱、ライン90のグエンの復唱で、「家賃の予算は4万円まで」という情報を共有し、最終的には、コミュニケーションが成功したことがわかる。

グエンは、最初、「家賃」という言葉がわからなかったが、店員のゼスチャーや「いくら」という既知の言葉などの様々な手がかりから、「家賃」の意味を推測し、正確に答えることに成功している。「伝達意図の達成度」の観点から見れば、質問したり復唱したりして相手の言ったことを確認するだけではなく、相手のゼスチャーを見ることによって、相手の発話の意図を推測し、コミュニケーションを成功させたといえる。これらのことから、グエンの「伝達意図の達成度」は、完璧ではないが、相手の意図を理解し、また自分の意図を相手になんとか伝達できているレベルであると言えるだろう。また、このような相互作用によって、最初はわからなかった「家賃」という言葉の意味が理解できたという意味で、一時的にせよ、「相互作用が、学習を促進した」と考えることができる。

4.1.2. 「ポライトネスの適切性」

次に、「ポライトネスの適切性」について考察する。談話例2のスピーチレベルの評定を見ると、グエンの12発話中5発話(42%)が敬体であるべきところが常体になっており、ローカルな観点からは、2名の評定者から適切でないと認定されていることがわかる。つまり、グエンの発話の約42%が、敬体と常体のどちらがより適切かということについて、母語話者とグエンとの見積もり差が、許容できるずれ幅(α)を超えており、許容範囲内に入っていないということになる。しかし、グローバルな観点から逆の見方をすると、グエンの12発話中7発話(約58%)は自然であると評定されているということであり、ライン69の「スーパーマーケットがありますか?」、ライン72の「何の店ですか?」というように、適切な場所で敬体を使用していることもあることを見ると、グエンが敬体を学習していないわけではないことがわかる。

このように、グエンの発話には、ローカルな観点から見るといくつかポライトとは言えない部分があるが、これには、「ポライトネスの受け止め方の相対性」という側面が関係してくる。つまり、グエンの日本語力があまり高くないので、店員は、「ポライトネスの適切性」より、「伝達意図の達成度」を優先しているように見える。ディスコース・ポライトネス理論で考えると、グエンの日本語力が高くないことによる「相対的認知」により、聞き手(店員)側の認知としての実際の「ポライトネス効果」は、マイナス効果にはなっていないと考えられる。換言すると、店員の「許容できるずれ幅(α)」が大きめになっていると解釈できるのである。そのため、グエンの発話に、規範的な観点からはポライトには感じにくい部分があったとしても、店員は気にせず、話はスムーズに進んでいるのである。このように、「ポライトネスの適切性」は、聞き手によって相対的に受け止められるものとして捉えられる。これらを総合的に考えると、グエンの「ポライトネスの適切性」には、致命的な問題はないと判断できよう。

ただし、「ポライトネスの適切性」の「学習」という観点からは、店員が「許容できるずれ幅(α)」を大きく設定していることによって、グエンが、ここでの店員とのやりとりという相互作用から、自分の発話の「ポライトネス」の不適切なところに気づき、「ポライトネスの適切性」について学習できる機会が少なくなってしまうとも考えられる。つまり、「ポライトネスの適切性」の学習に関しては、自然なやりとりにおいては、なかなか指摘されることが少ないため、自然会話における学習だけでは効率が悪く、「教

室内」における教師の的確な指導が必要であるということを示唆している。

そのため、授業などで「自然会話」を教材として積極的に利用し、その際に、教師の側が「ポライトネスの適切性」を意識して、指導やフォローをしていくことが必要であると言えるだろう(自然会話の教材化については、宇佐美(2007a, 2007b)を参照のこと)。それでは、「言語行動の洗練度」は、どうなのだろうか。次項で考察する。

4.1.3. 「言語行動の洗練度」

談話例から明らかのように、グエンは、複雑な文や高度な語彙を使っているわけではなく、グエンの文レベル(表現法等)から見た「言語行動の洗練度」は、高くないと言える。上でも見たように、グエンは、こういう状況(不動産屋での初めての問い合わせ)においては「敬体」が「無標スピーチレベル」であるということは、ある程度把握していると考えられる。しかし、グエンの発話のスピーチレベルの42%が、不適切だと評定されているということは、グエンは、「敬体」が無標スピーチレベルである時に、それを省略しても失礼にならない部分で省略したり、時には常体を使用する、という「グローバルな観点から見た敬体の使用・不使用」という「スピーチレベルのシフト操作」が、十分には学習できていないということになる。よって、談話レベルから見た「言語行動の洗練度」も低いと捉えられる。スピーチレベルの「シフト操作」は、グローバルな観点からしか捉えられないものであり、ここでは、ポライトネスというよりも、むしろ「言語行動の洗練度」の問題として捉えられる。

先に見た「ポライトネスの適切性」が、聞き手の受け止め方によって影響される「相対性」の強いものであるのに対して、「言語行動の洗練度」は、理論的には、絶対的観点からある程度順序づけられるものであり、今後の研究が期待されるところである。

4.2. ローカルな観点、グローバルな観点から見た「相互作用と学習」

次に、このやりとりにおける「相互作用と学習」について、改めて、ローカルな観点とグローバルな観点から分析する。グエンの会話に戻ろう。具体的な予算がわかったところで、話は先に進む。

談話例3(談話例1を再掲)

ライン番号	話者	発話内容	スピーチレベル
91	店員	/沈黙2秒/ はい、4万円ぐらいで、じゃあ3万円台で探すということですね。	
92	グエン	でも、このー(うん)、このー、お金ぐらいは(ん)、えっとー、キッチンやシャワーはどう？	←要「ですか」 ×
93	グエン	キッチン、シャワー…。	○
94	店員	キッチン？、えー、光熱費かな？	
95	店員	あのガスとか、電気とかか？ < >。	
96	グエン	<うん> > 、うん。	○
97	店員	うん、そういうお金をまた別に支払わなくてはいけません。	
98	グエン	あー、(うん)別。	←「ですか」不要 ○
99	店員	別です。	
100	グエン	えーと、あー、自分の部屋は<ない> < >。	←「ですか」不要 ○
101	店員	<そうで> > すね。	
102	店員	え？、別の(ん)、あー(あ[説明しようと手を広げる])、うん、例えば、んー、ちょっと待ってね。[店員が資料を取りに席を立つ]	
103	店員	/沈黙5秒/[資料を持って戻る] こちらの今ちょっと多磨駅の近くの(はい)物件なんです、ちゃんとどのお部屋にもこういう風にお部屋に(んー)、キッチンがあって、(はい)おトイレとお風呂がある感じですね。[資料(間取り図)を見せながら説明する]	
104	グエン	あー、じゃ、全部4万。	←要「ですか」 ×
105	グエン	1ヶ月4万？	←要「ですか」 ×
106	店員	ん、これはちょっと違いますけれども(んー)、1ヶ月4万円のところを、探す、という形になります。[おそらく、見せた資料にある部屋は大きめだった]	

まず、ローカルな観点から「伝達意図の達成度」を検討する。2.2. で述べたように、ライン92のグエンの「でも、この、このー、お金ぐらいは、えっとー、キッチンやシャワーはどう？」という発話は、家賃の話をしているという文脈から、「このくらいの部屋(3万円台の部屋)に台所や風呂は付いているか」という質問であることは推測可能である。しかし、店員にはその意図が伝わらず、店員はライン94で「キッチン？、えー、光熱費かな？」と言っ

ている。つまり、店員には、ライン92のグエンの発話「キッチンやシャワーはどう？」だけでは、光熱費のことか、設備の有無を尋ねているのかが分からなかったのである。ローカルな観点から見ると、グエンは、「どう」以下(どうですか？付いていますか？)を省略したことによって、店員と、うまく意思疎通ができなかったと解釈できる。つまり、ローカルな観点からは、この発話によるコミュニケーションは失敗していると言える。

しかし、このやりとりをさらにグローバルな観点から見ていくと、ライン100のグエンの発話「自分の部屋はない」が、グエンが店員の発話の意味を理解していないことを露呈したことによって、その後の店員のさらに丁寧な説明が誘発されたと見ることができる。

ライン97で店員が「うん、そういうお金をまた別に支払わなくてはいけません」と説明したときに、グエンがライン98で「別」だけを繰り返したことから、グエンは、「別」という言葉しかわからなかったのではないかと推測できる。そして、この後、ライン100でグエンが、「別」という言葉を手がかりに、「(キッチンやシャワーが)自分の部屋(に)はない」[()内筆者]と、自分なりに理解したことを自分の言葉で言い直したときに、店員は、はじめてグエンがそれまでの話を理解していなかったということに気づく。そこで、店員は、資料(間取り図)を取りに行き、ライン103以降で、それを見せながら分かりやすく説明したのである。ライン103の店員の丁寧な説明は、グエンにとって理解可能なインプットとなった。そして、グエンは最終的には必要な情報を得ることができ、伝達意図は達成されたのである。

すなわち、グローバルな観点から見ると、ライン100のグエンが内容を理解していないことを示す発話が引き金となって、グエンと店員との新たな「相互作用」が生じた。そして、そのことによって、店員の説明がより分かりやすいものへと変わっていき、グエンは、結果として理解可能なインプットを得ることができたのである。「相互作用が学習を促進する」ということの1つのきっかけがここに見られる。

4.3. 自然会話の分析から考える「相互作用と学習」

これまでに論じてきたように、「相互作用と学習」を考える際は、グローバル・ローカル双方の観点で捉え、多角的に見ていく必要がある。会話という相互作用において、一旦ミス・コミュニケーションが生じた後に、いくつかの意味交渉という相互作用を経て、最終的には、コミュニケーションが

成功したというグエンの例は、「相互作用が学習を促進する」ということの1つの証となるだろう。つまり、それは、学習者が、「学習」の定義である「以前はできなかったことができるようになる」ということを明確に示しているためである。ただ、その相互作用の効果をローカルな観点からのみ考えると、学習者が「一時的に」あることができるようになっただけだと考えられるかもしれない。しかし、同じ現象をグローバルな観点から考えてみると、学習者がローカルな範囲で得た知識は、新たな知識として学習者の知識体系の中に追加されたり、既知の知識の書き換えを行ったりするものと位置づけられる。短期記憶が長期記憶として定着するのと同様に (Atkinson & Shiffrin 1968)、会話という相互作用においてローカルな観点から見て失敗したやりとりから学習されたことというのは、学習者の知識体系の中に蓄積されていくことによって、グローバルな観点から見ると、特定の語彙の意味や機能、円滑なコミュニケーションの方法の学習を促進していると考えることができる。会話におけるやりとりという「相互作用」は、そのような長期的に見た学習の全体的プロセスの中の、ローカルな部分を活性化させるものであると捉えることができるだろう。

本論で扱ったデータは、オーラル・プロフィシエンシーの3つの観点から考えると、「伝達意図の達成度」については、相互作用の効果がわかりやすく表れたものであった。しかし、相互作用が「ポライトネスの適切性」や「言語行動の洗練度」の学習に及ぼす効果については、今後、さらなる研究が必要である。これらの現象が見られる事例の分析や、縦断的研究なども含めて、より総合的な観点から分析していくことが望まれる。

5. まとめ

本論では、会話における相互作用を正しく解釈するためには、ローカル分析とグローバル分析の双方を行うことが重要であるということを論じた。その上で、対人コミュニケーション論としてのディスコース・ポライトネス理論の観点から考えると、第二言語における円滑なコミュニケーション方法の修得とは、「学習者が、種々の談話の基本状態、言語行動のフェイス侵害度、それに応じて選択したポライトネス・ストラテジーの、目標言語・文化の成員との『見積もり差 (De 値)』を、許容できるずれ幅内に収めることができるようになること」だと位置づけた。また、相互作用が第二言語における円滑なコミュニケーション方法の修得を促進するかどうかについては、「伝達意図の達成度」、「ポライトネスの適切性」、「言語行動の洗練度」という3つ

の観点それぞれから考える必要があることを論じた。

「第二言語の教育」という観点から考えると、様々な談話やその要素としての言語行動の基本状態や言語行動の有標性の見積もりを、目標言語・文化の成員の見積もりに近づけるためには、現実のコミュニケーションを追体験する機会をできるだけ増やす必要がある。人間の相互作用において、様々な談話の基本状態や、種々の言語行動のフェイス侵害度や、それに応じたポライトネス・ストラテジーを見積もるために有効な手がかりは、日常のあらゆるところにある。ローカルな観点からは、今その場で行われているやりとりにおける様々な手がかりが、その言語・文化における基本状態を判断する材料となる。また、グローバルな観点からは、目標言語・文化における学習者自身の様々な体験の蓄積の総体に基づく知識や百科事典的知識が、判断材料となる。様々な形を取り得る人間同士の「相互作用」は、その過程の中で、何らかの学習を促進していると考えられる。このような「総合的会話分析」から得られる知見は、「視点としての日本語教育学」という捉え方 (宇佐美 1999a) をすることによって、語用論研究のみならず、広く日本語教育学に貢献していくことができる。

今後の言語教育においては、学習者が、目標言語・文化における種々の基本状態を、効率的、且つ、的確に把握できるような情報や言語環境を教師が提供し、その中における様々な「相互作用」を通して、円滑なコミュニケーションとしての「ポライトネス」も含めた「言語学習」を促進させていく工夫が、ますます重要になっていくだろう。

〈文字化資料で用いられている記号凡例〉 (宇佐美 2006b より1部修正して抜粋)

〔全角〕1 発話文の終わりにつける。

” 発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。

①〔全角〕1 発話文および1ライン中で、日本語表記の慣例に沿って読点をつける。

②発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。

①複数読み方があるものを漢字で表す場合、最も一般的な読み方ではなく、特別な読み方で発せられたことを示すために、その読み方を平仮名で ‘ ’ に入れて示す。

- ②通常とは異なる発音がなされた場合など、音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、' ' の中に正式な表記を記入する。
- ? 疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても、語尾を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末(発話文末)なら「?。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには、発話中に「?,」をつける。
- ?? 確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。
- [↑] [→] [↓] イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の略号として、[↑] [→] [↓] を用いる。
- / 少し間 / 話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。
- / 沈黙 秒数 / 1秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。沈黙自体が何かの返答になっているような場合は1発話文として扱い1ライン取るが、基本的には、沈黙後に誰が発話したのかを同定できるように、沈黙を破る発話のラインの冒頭に記す。
- = = 改行される発話と発話の間(ま)が、当該の会話の平均的な間(ま)の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。これは、2つの発話(文)について、改行していても音声的につながっていることを示すためである。その場合、最初のラインの発話の終わりに「=」をつけてから、句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。そして、続くラインの冒頭に「=」をつける。
- … 文中、文末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。
- < > {<|} 同時に発話されたものは、重なった部分双方を< >で囲み、< > {<|} 重ねられた発話には、< >の後に、{|} をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、< >の後に、{|} をつける。
- [[]] [全角] 第1話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した場合は、「[[]]」をつける。結果的に終了した第1話者の発話文の終わりには、句点「。」の前に[[をつけ、第2話者の発話文の冒頭には]]をつける。
- [] 文脈的情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすく

なるように、音声上の特徴(アクセント、声の高さ、大小、速さ等)のうち、特記の必要があるものなどをそのラインの一番最後に記しておく。研究者用のメモとしての位置づけ。

- () 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()で囲って入れる。
- < > 笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に、<笑いながら>、<2人で笑い>などのように説明を記す。基本的には、笑いを含む発話中か、その発話文の最後に記し、その後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。笑い自体が何かの返答になっているような場合は1発話文とみなし、改行する。
- (< >) 相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(<笑い>)とする。
- " " 発話中に、話者以外の人の発話が直接引用された場合、その引用された部分を" "で囲む。
- 『 』 視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるもの、例えば、漢字の読み方を説明する部分、本の題名や、話者自身の発話を引用した場合などは、その部分を『 』で囲む。
- 「 」 トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護ために明記できない単語を表すときに、「地名」のように示す。

注

1. 日本語以外の言語で提唱された概念を日本語に翻訳すると常に生じてくる問題であるが、“second language acquisition”にかかわる概念、用語は、それぞれ文献に応じて、また翻訳者、執筆者によって、“learning”は「学習」「習得」、 “acquisition”は「習得」「修得」「獲得」と用語・表記がまちまちであるのが現状である。筆者は、これらの概念をなるべく忠実に表し、かつ必要に応じて区別ができるように、基本的に以下のように用いることにする。すなわち、心理学の用語として定着している“learning”については、基本的に、単独で“learning”と用いられる際は「学習」、 “language learning”は、文脈に応じて、「言語学習」または「言語習得」、また、Krashen (Krashen & Terrell, 1983) のいう“acquisition”は「獲得」、 “second language acquisition”のように、“learning”と“acquisition”の双方を含む意味で用いられる際の言語「しゅうとく」は、第二言語「修得」のように「修得」と表すことにする。以下、「第二言語修得論」とするのはそのためである。
2. 「談話の定量的分析－言語社会心理学的アプローチ」(宇佐美, 1999b) に、ローカル分

析、グローバル分析の考え方(宇佐美, 2006c)をより明確に組み込んだものを、「総合的会話分析」と呼ぶ。

3. 以下に、本論で用いる会話データの基本的な情報を簡単に記す。

グエンの会話	
場面	日本語学習者が東京外国語大学周辺の不動産屋で部屋を探す
話者	中級話者(ベトナム人)と不動産屋店員(日本人)
分析対象時間	4分55秒

ここで紹介する会話は、2005年度に東京外国語大学大学院で行われた夏期集中講義(接触場面の教材化: 鎌田修教授)の課題として学生が録画した会話である。収集者が協力者の承諾を得て会話場面を設定・録画しているため、厳密な意味での自然会話とは言えない。しかし、創作された会話とは違って、会話参加者の言語行動自体は統制されていない自然なものである。そのため、本論では冗長を避けるため、このような「準自然会話」も含めて「自然会話」と呼ぶ。

4. 便宜上、BTSJにおける発話文番号と発話文終了の列は省略してある。
5. 宇佐美(2003b, 2007a), Usami(2006a, 2006c)に加筆・修正を行ったものである。
6. ポライテネス研究の流れの概観, ブラウンとレビンソンのポライテネス理論及び、その批判の問題点などについては、宇佐美(1993, 1998, 2001a, 2002), Usami(2002, 2006b)を参照されたい。
7. トマス著, 浅羽監修(1998: 205)より、2次引用しておく。
「…レヴィンソン(1979: 368)は、活動の型を次のように定義している。
…[活動の型]とは、境界のはっきりしないカテゴリーであり、その主たる構成要素は活動の目的によって定義され、社会的に構成され、制約されている。言い換えれば参加者や状況など、とりわけ許されている寄与の種類について、制約を持つ事象のことである。典型的な例としては、教育現場、就職のための面接、法廷尋問、フットボールの試合、ワークショップの活動、ディナー・パーティーなど。」
8. スピーチレベルの使い分けは、「言語行動の洗練度」や「ポライテネスの適切性」にかかわる。そこで、グエンの発話が日本人にとって自然に聞こえるかどうかを、第二評定者をたて、グエンの発話すべてを対象として評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa)を算出した。不動産屋での問い合わせ会話の総発話文数は107発話あり、グエンの発話は42発話、分析対象となる発話(あいづちや挨拶を除き、敬体になる可能性のある発話)は30発話であった。敬体になりうるすべての発話について、敬体の場合と敬体でない場合でどちらがより自然と感じるかを、2人の評定者が個別に評定した結果、評定者間信頼性係数は、 $\kappa=0.79$ であった。0.75以上は、信頼性が高いと見なしてよいとされている。また、 κ が0.7未満であれば、コーディングの定義、分類方法等に関問題があるとみなしたほうがよいとされている。(Bakeman & Gottman, 1986)。
9. ライン67は、ライン69と合わせて1発話文になると認定した。その場合、BTSJでは、「発話文番号」は、ライン67は「67-1」、ライン69は「67-2」のように記し、ライン67単独では、コーディングをしない。詳しくは、宇佐美(2006b)を参照のこと。

参考文献

- Atkinson, R. C. & Shiffrin, R. M. 1968 Human memory: A proposed system and its control processes. In K.W. Spence, (Ed.), *The psychology of learning and motivation: Advances in research and theory*. New York: Academic Press. pp. 89-195.
- Bakeman, R. & Gottman, J. M. 1986 *Observing interaction: an introduction to sequential analysis*. New York: Cambridge University Press.
- Brown, P. & Levinson, S. C. 1987 *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: New York: Cambridge University Press.
- Ellis, R., Tanaka, Y. & Yamazaki, A. 1994 Classroom Interaction, Comprehension, and the Acquisition of L2 Word Meanings. *Language Learning*, 44, 449-491.
- Ellis, R. & He, X. 1999 The roles of modified input and output in the incidental acquisition of word meanings. *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 285-301.
- Firth, A. & Wagner, J. 1997 On Discourse, Communication, and (Some) Fundamental Concepts in SLA Research. *The Modern Language Journal*, 81 (3), 285-300.
- Gass, S. M. 2003 Input and Interaction. In C. J. Doughty & M. H. Long, (Eds.), *The Handbook of Second Language Acquisition*. UK: Blackwell. pp. 63-103.
- Krashen, S. D. & Terrell, T. D. 1983 *The natural approach: Language acquisition in the classroom*. Hayward, CA: Alemany Press.
- Larsen-Freeman, D. & Long, M. H. 1991 *An introduction to second language acquisition research*. New York: Longman. (牧野高吉・萬谷隆一・大場浩正訳 1995『第2言語習得への招待』鷹書房弓プレス)
- Lave, J. & Wenger, E. 1991 *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. New York: Cambridge University Press. (佐伯胖訳 1993『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書)
- Long, M. 1983 Native speaker/ non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistic*, 4, 126-41.
- Long, M. 1996 The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. Richie & T. Bhatia, (Eds.), *Handbook of second language acquisition*. San Diego, CA: Academic Press. pp. 413-468.
- 仲真紀子 1995「2～4歳児とその母親、大人他者と母親の対話にみられる助数詞の使用」『教育心理学会第37回総会発表論文集』p. 505.
- 仲真紀子 1996「対話における語彙獲得—助数詞の獲得に関する予備的分析」『千葉大学教育学部研究紀要』, 44 (1), 71-78.
- 宮武かおり 2007「日本人友人間の会話におけるポライテネス・ストラテジー—スピーチレベルに着目して」東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文
- Pica, T. 1994 Research on negotiation: what does it reveal about second-language learning conditions, processes, and outcomes? *Language Learning*, 44, 493-527.
- Swain, M. 1985 Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. Gass & C. Madden, (Eds.), *Input in second language acquisition*. Rowley, MA: Newbury House. pp. 235-253.

- Swain, M. 1995 Three functions of output in second language learning. In G. Cook & B. Seilhofer, (Eds.), *Principles and practice in applied linguistics: Studies in honour of H. G. Widdowson*. Oxford: Oxford University Press. pp. 125-144.
- Swain, M. 2000 The output hypothesis and the beyond: Mediating acquisition through collaborative dialogue. In J. P. Lantolf, (Ed.), *Sociocultural theory and second language learning*. Oxford: Oxford University Press. pp. 97-114.
- 田島信元 2003『共同行為としての学習・発達—社会文化的アプローチの視座』金子書房
- 高木光太郎 1996『実践の認知的所産』『認知心理学 5 学習と発達』東京大学出版会 pp. 37-58.
- トマス, ジェニー 1998『語用論入門』(浅羽亮一監修 田中典子・津留崎綾・鶴田庸子・成瀬真里訳) 研究社出版 (Thomas, J. 1995 *Meaning in interaction: an Introduction to Pragmatics*. London: Longman)
- 上野直樹 1999『仕事の中での学習 状況論的アプローチ』東京大学出版会
- 宇佐美まゆみ 1995「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』, 662, 27-42. 昭和女子大学近代文化研究所
- 宇佐美まゆみ 1993「談話レベルから見た “politeness” — “politeness theory” の普遍理論確立のために」『ことば』, 14, 20-29. 現代日本語研究会
- 宇佐美まゆみ 1997「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」現代日本語研究会(編)『女性のことば・職場編』ひつじ書房 pp. 241-268.
- 宇佐美まゆみ 1998「ポライトネス理論の展開—ディスコース・ポライトネスという捉え方」東京外国語大学日本課程・留学生課(共編)『日本研究・教育年報 1997 年度版』pp. 147-161. 東京外国語大学
- 宇佐美まゆみ 1999a「視点としての日本語教育学」『月刊言語』, 28 (4), 72-80. 大修館書店
- 宇佐美まゆみ 1999b「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ」『日本語学』, 18 (10), 40-56. 明治書院
- 宇佐美まゆみ 2001a「ポライトネスの談話理論構想」国立国語研究所(編)『談話のポライトネス』凡人社 pp. 9-58.
- 宇佐美まゆみ 2001b「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること」『語学研究所論集』, 6, 1-29. 東京外国語大学語学研究所
- 宇佐美まゆみ 2001c「二一世紀の社会と日本語」『月刊言語』, 30 (1), 20-28. 大修館書店
- 宇佐美まゆみ 2002 連載「ポライトネス理論の展開 1-12」『月刊言語』, 31 (1-13). 大修館書店
- 宇佐美まゆみ 2003a「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成 13-14 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C (2)『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』(課題番号: 13680351) (研究代表者: 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書. pp. 4-21.
- 宇佐美まゆみ 2003b「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から」『国語学』, 54 (3), 117-132. 国語学会
- 宇佐美まゆみ 2006a「談話研究からの視点」『南山日本語教育シンポジウム プロフィシ

- ンシーと日本語教育 日本語の総合的能力の研究と開発を目指して』関西 OPI 研究会. pp. 19-31.
- 宇佐美まゆみ 2006b「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2005 年 2 月 25 日版」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」pp. 21-46. (随時更新した最新版は, 以下の URL からダウンロードできる. <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm>)
- 宇佐美まゆみ 2006c「談話研究におけるローカル分析とグローバル分析の意義」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』(言語情報学研究報告 No.13) 宇佐美まゆみ(編) 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」pp. 229-243.
- 宇佐美まゆみ 2007a「自然会話の教材化とディスコース・ポライトネス理論 1—対人コミュニケーション論としてのディスコース・ポライトネス理論の考え方」『第一回ルーマニア日本語教師会 日本語教育・日本語学シンポジウム報告書』ルーマニア日本語教師会. Avrin Press. pp. 12-25.
- 宇佐美まゆみ 2007b「自然会話の教材化とディスコース・ポライトネス理論 2—教材としての自然会話の価値」『第一回ルーマニア日本語教師会 日本語教育・日本語学シンポジウム報告書』ルーマニア日本語教師会. Avrin Press. pp. 26-38.
- 宇佐美まゆみ 2008 (予定)「伝達意図の達成度」「ポライトネスの適切性」「言語行動の洗練度」から捉えるオーラル・プロフィシエンシー 鎌田修・堤良一・山内博之(編)『プロフィシエンシーと日本語教育(仮)』ひつじ書房
- Usami, M. 2002 *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Hituzi Syobo.
- Usami, M. 2006a Discourse politeness theory and cross-cultural pragmatics. In A. Yositori, T. Umino & M. Negishi, (Eds.), *Linguistic informatics V: Studies in second language teaching and second language acquisition*. 21st Century COE: Center of Usage-Based Linguistic Informatics, Graduate School of Area and Culture Studies. Tokyo University of Foreign Studies (TUFS). pp. 9-31.
- Usami, M. 2006b A preliminary framework for a discourse politeness theory: Focusing on the concept of relative politeness. *Studies in language sciences (5): Papers from the fifth annual conference of the Japanese society for language science*. Kurosio Publishers. pp. 29-50.
- Usami, M. 2006c Discourse politeness theory and second language acquisition. In W. M. Chan, K. N. Chin & T. Suthiwan, (Eds.), *Foreign language teaching in Asia and beyond: Current perspectives and future directions*. Centre for Language Studies, Faculty of Arts and Social Sciences, National University of Singapore. pp. 45-70.
- 内田伸子 1999『発達心理学 ことばの獲得と教育』岩波書店